

平成25年度
トウール市青少年親善研修生
派遣報告書

平成25年8月17日(土)～8月31日(土) 15日間



公益
財団
法人

Takamatsu International Association

高松市国際交流協会



目 次

1. 日程	1
2. フォトギャラリー	3
3. 親善研修生 報告書 I	
香川大学 経済学部2年 武上 実佑	
日誌・活動記録	5
感想文「トゥール市親善研修を終えて」	16
4. 親善研修生 報告書 II	
香川大学 医学部1年 三浦 ありさ	
日誌・活動記録	17
感想文「感謝」	29

平成25年度 トゥール市青少年親善研修生派遣事業日程

日 時	時 間	内 容
8月17日(土)	19:15 20:35	JL1414 高松空港出発 羽田空港到着
8月18日(日)	0:40 6:20 8:19 9:59 10:00	JL041 羽田空港出発 シャルル・ド・ゴール到着 TGV5200 シャールル・ド・ゴール2出発 サン・ピエール・デ・コール駅到着 サン・ピエール・デ・コール駅お迎え
8月19日(月)	9:30	市役所前集合、徒歩でトゥール市観光 終日市内見学 昼食 工芸美術館、パティスリー見学
8月20日(火)	10:00 14:00	トラムハウス見学 昼食 病院(癌腫学)見学
8月21日(水)	9:00 14:00	ショーモン城、庭園見学 昼食 高松市紹介、文化教室①
8月22日(木)	9:00 14:30	ブプレーにてワインカーブ見学、ブドウ畑散策 昼食 高松市紹介、文化教室②
8月23日(金)	9:00	自転車にて、ロワール川散策 昼食 ヴィランドリー城見学
8月24日(土)		自由行動
8月25日(日)		自由行動
8月26日(月)	10:00 11:00	市役所見学 市長表敬訪問 昼食 自由行動
8月27日(火)	9:00	古城めぐり(アンボワーズ城、リュセ館、シュノンソー城) さよならパーティー
8月28日(水)	7:59 9:21	TGV8308 トゥール駅出発 モンパルナス駅到着 パリ観光 ホテル泊
8月29日(木)		パリ観光 ホテル泊
8月30日(金)	11:30	JL042 シャールル・ド・ゴール出発
8月31日(土)	6:30 7:55 9:10	羽田空港到着 JL1403 羽田空港出発 高松空港到着

Les photographies de souvenirs

Le 17 août~le 31 août 2013

en Tours





親善研修生 報告書 I

1. 書告類 空齋孤鶴詩

日誌・活動記録

香川大学経済学部 2年 武上 実佑

8月17日(土)

遂にフランスに飛び立つ日がやってきた。楽しみが30パーセント、緊張が70パーセントというところだったように思う。実は、2週間とはいえ、実家をそんな期間離れたことがなかったので、そこからくる緊張であった。とりあえず、文化教室で使う折り紙とうちわだけは忘れずに、大きなスーツケースを転がして高松を出発し羽田へ。

最後は日本食がいいよね、と三浦さんとお腹いっぱい食べた。この時点で食欲だけが取り柄の私と同じように、彼女もよく食べる人なのでは…と薄々気づいていたが、後程報告に出てくるが、二人で研修中に出された料理はほとんど完食した。

フランスへ向かう飛行機の中はすごく寒くて、ひざ掛けをかぶってなんとか耐え抜いた。この時は緊張も吹っ飛んで、自分がフランスに着く前に風邪をひくか凍死したらどうしようとか考えていなかった。しかし、ぐっすり眠ったし、いつも超健康体なのでそんな心配は不要だったのだけれども。

8月18日(日)

シャルル・ド・ゴール空港に到着して、駅を目指して歩いた。不安になるくらいまっすぐ歩き続けると駅にたどり着くことができた。

TGVが発車するまで時間があったので、その間、ますますフランスに来てしまったことを実感した。ここで私は何ができるのだろうか、何を心得て帰るのだろうか、と少し考えた。しかし、女は度胸だ、なるようになる、という大和撫子魂を胸に、そんな不安もすぐ消えた。

TGVが案外狭くて(私の荷物が大きすぎたとは言わせない)スーツケースの置き場に困ったが、どうにか載せることが出来てトゥールに向かう。車窓には広い畑だったり、ひしめく家々だったり、ヨーロッパの風景が広がっていて興奮した。

駅でトゥール市のダヴィットさん、コーディネーターの伴さんにお会いして、ステイ先のマダム(ホストマザー)と対面した。挨拶もそこそこにマダムの車でお家へ連れて行ってもらう途中、なんと、マダムはあまり英語が得意でいらっしやらないらしく、少し心配になった。

下宿先として留学生を受け入れているお家だったので、下宿生であるアメリカ人のカレンとスイス人のアリアナがトゥール市内を案内してくれた。2人とも歳が近くて、うれしくなった。美術館などが好きなのだが、教会で開かれていた現代アート展にも連れて行ってもらって満足した。お店が立ち並ぶ通りはお店がほとんど閉まっていた驚いた。日曜日こそ稼ぎ時なのでは、と思った



『ダヴィットさんと』

けど、フランスの人はあまりお金をかけず休日を過ごすみたいだった。到着してからひたすら歩いたので、さすがの私も疲れてしまった。

しかし、マダムの妹夫婦が遊びに来ており、しかもその双子の息子さんたちが誕生日だったということで、みんなでお祝いをした。来て早々なこともあって、飛び交うフランス語の会話に戸惑ってしまったけれど、楽しい雰囲気だった。この日の夕飯はラザニアでとてもおいしかった。

8月19日(月)



『あめ作りに挑戦』

家から市役所まで徒歩20分であったので、歩いて向かった。通勤途中の人、お花屋さん、パン屋さん、お惣菜屋さんやカフェの横を通っていくことがとても楽しかった。ほとんどの待ち合わせ場所に歩いていったが、一度も景色に飽きることはなかった。

市内散策では前日に案内してもらっていたところの説明もあって、面白かった。トゥール市内のロワール川の景色のみがユネスコに登録されており、その登録が取り消されないように、電信柱や新しい建物は作ってはならないという条例がわざわざ作られたそう。

このような景観を保存していく政策と同時に、トラムの建設など進化したものも取り入れていることや国内外から多くの学生を受け入れていることなどが分かった。

ランチの後は、職人博物館に向かった。コンパニョナージュという徒弟制度があるらしい。見習いの職人が杖を持ち、フランス全土で修行してまわっていくというのはお遍路さんに似ていると思った。すごく厳しい道らしいけれども、ずっと残って欲しい。また、日本の職人の技術も、もちろんすごいのだが、フランスの職人の作品は豪華でかつ独創的なものが多いように感じた。

博物館の隣にあるお菓子屋さんでは、かつて高松市に来られたこともある職人さんが、私たちのために定年で退職されているにもかかわらず、お菓子作りを見せてくれた。あめ作りはパットに敷き詰めた片栗粉に適当に指で穴をあけ、適当に温めたあめを流し込むので、お菓子作りに繊細なイメージを持っていた私にとっては大胆のように感じた。しかし、実際に体験させていただいたときには、見た以上に難しく、プロとの差を痛感する私であった。お菓子職人は他の職人から低く見られていたそうだけれども、全くそんなことはなかった。

帰ってから、夕食のとき、たまに英語で話しかけてもらって会話したけれども、自分の言いたいことを上手く伝えられなかった。でも、話が出来ないなりにわかったことは、食事での会話をすごく大事にしていることだ。1時間以上かけてゆっくり食事をし、今日あった出来事、明日何するのか、自分の国の話など、人数が多いということもあつただろうが、みんなの話題は尽きなくていいなと思った。日本人の中には食事はみんな別々に食べたり、テレビや携帯電話を見ながら夕食をとったりする、という家庭も少なくはないだろう。その分、フランスの家庭が温かく感じた。

8月20日(火)

トラムハウスの見学から始まった。今回私のメインの目的の1つでもある。トゥール市のトラムは、



『トラムハウス見学』

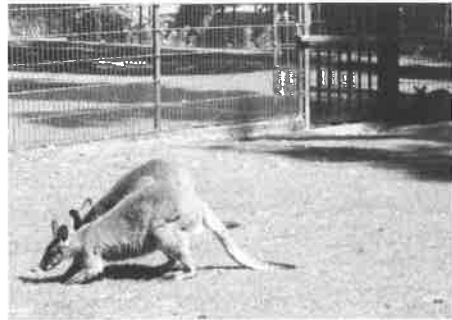
6分おきに4時から深夜1時まで運行している。高圧の電力で動かされており、市内では電線を通していない。デザインにも凝っていて、空間になじむようにシルバーの車体になったそうだ。

歩行者や自転車と同じところをレールが通っており、試運転もかなりされていたので、トラムはすでに街の一部に溶け込んでいるような印象を受けた。ちょうど開通式の前にはトゥール市を離れてしまうので、乗れなかったけれども、今度来るときにはぜひ乗ってみたいと思った。そのときには、町の主要な交通機関となっているだろう。

少しお店を見て回り、昼食を食べた後、午後からは病院見学へ向かった。時間が少しあったので、近くの植物園に案内していただいた。ヤマアラシやフラミンゴ、ワラビーなど動物園さながらの動物の種類が多さに驚いた。「植物園なのに動物がいる。しかも入場無料だなんて！」

と、この1日で何よりも興奮した私であった。日向ぼっこをしている人も多く、高松市にもこういった気軽に入れて楽しい場所があれば、コミュニティの場として活躍するだろうに、と思った。

病院はお城のように大きくて歴史がありそうな建物だった。日本でも病院を見学する機会には私の人生中にはなかったのに、まさかトゥール市で調剤を行う場面を見せていただけとは思わなかった。病院で聞いたお話を、今後私は雑学程度に生かすことしかできないだろうが、真剣に話を聞いて、写真をたくさん撮っている三浦さんを見て、「立派なお医者さんになって私のお世話もしてね。」とその背中に念力を送った（届いただろうか）。



『ワラビー』

8月21日(水)



『ショーモン城』

朝9時から伴さんの車に揺られてショーモン城まで行った。初の古城である。こんなところに住むとは贅沢だ、と思った。装飾の1つ1つに、一般家庭では見られない豪華さが見られた。

また、お庭もとても広かった。全部は回りきれなかったのだけれども、ちょうど庭園コンテストというものをされていて、いろいろな国のアーティストによって個性的な庭が作られていた。日本人アーティストも田んぼのような庭を作っていた。もはや庭というより、田んぼが庭園というところが斬新だった。

そして、きちんとカエルも田んぼの中にいた。

お昼は私が絶対食べたかった、そば粉の入ったクレープのようなフランスの郷土料理、ガレットを食べることが出来て幸せだった。デザートはチョコバナナクレープもちゃっかり食べて、そのまま文化教室へ向かった。

何を隠そう、ここが私の緊張がMAXの瞬間だった。しかし、それ以上に高松市について紹介したいという気持ちが強くあった。私も



『念願のガレット』



『マダム!』

ずっと高松市に住んでいるので、つい最近まで意識していなかったが、高松市は外国でも誇れるような風景や物がたくさんある。それをできるだけ多く知ってもらうことが、私の今一番の夢であったから、この機会を無駄にはしなかった。本番まで、フランス語の原稿を自分で何回も音読して、練習してきたのだから大丈夫だ、と自分に気合を入れた。

文化教室はまず、うちわ作りから始まった。これがびっくりするほど大変だった。完成品は見せていたものの、やはりやり方がわからないのか「マダム！」と質問され、質問はされても意味が分からず、てんやわんやだった。伴さんの助けで、うちわの糊付けが無事終わり、乾かしている間に私の高松市についての紹介を行った。たぶん私の発音では意味の分からない部分もあっただろうけど、写真を見せたときに何人かが「おお！」と言ってくれた。心の中では大きくガッツポーズ！やってよかった、と心の底から思えた。

そして、折り紙は楽しく出来たと思っている。日本で折り紙講師の方からいただいていた、キラキラの折り紙や3D折り紙が子どもにはやはり人気だった。

帰りに三浦さんと打ち上げと称して、アイスを食べた。先日留学生のアリアナがおすすめしてくれたお店に行った。私は「バーバパパ」というフレーバーが気になって、挑戦してみたけれどなんとも不思議な味だった。後から聞くと、「バーバパパ」とはフランス語で「綿あめ」のことらしい。



『バーバパパと』

帰ると、今日の夕飯はスフレとクレープだった。クレープは自分が好きなものをつけて、それをくるくると巻いてかぶりつくんだよ、と教えてくれた。はちみつとライムがマダムが一番おすすめだった。

8月22日(木)



『ソフィーさんと』

ワインカーブ見学の日だった。今日は伴さんではなく、香川に住んでいらしたこともあるソフィーさんの案内でブレーリに向かった。ソフィーさんは日本の植物について研究されているそうで、彼女のホームページも見たが、とても興味深い。ソフィーさんが香川にいたのは私が生まれた年らしく、すごいめぐり合わせのように思えた。

ワインカーブのツアーが始まるまで時間があつたので、先にブドウ畑を見せてもらった。今年はブドウが育つのが遅いと言っていたけれども、その量にびっくりした。終わりが無い畑なんて初めて見た。近くにあったソフィーさんおすすめの洞穴の中に作られたレストランも少しだけ見せてもらった。洞穴にレストランというミスマッチな感じがおしゃれだった。

そして、ワインカーブの見学は始まった。洞窟の中はひんやりとしていて、そこにはたくさんのワインがあつた。ワインなんて全部一緒だと思っていたけど、色や香り、味わい、気泡の大きさなど細かく違っていることを知って勉強になった。



『終わりが無い畑』

昼食をガングットでとりながら、ソフィーさんの日本にいたところの写真をを見せていただいた。なんと、ソフィーさんと共通の知り合いがいることが発覚して、とても驚いた。また、峰山にソフィーさんが国際交流員として植えた木があるそうなので、高松市に帰ったら絶対見ようと思った。

午後からは「ニャンコカフェ」というところで文化教室を行った。子どもたちと違っていたのは、うちわの形がみなさんとても自由で、雲形や小判型、クマ型など個性的だった。

そしてこの日は、なんだかんだで1度も話せていなかったマダムの娘さんのところに行き、日本から持ってきた和柄のしおりをプレゼントして少しお話した。とても喜んでくれ、その上、フランスに来るなんて、あなたはすごいね、と言ってもらえて嬉しかった。

夕食の時に、マダムが週末に寿司を作りたいので、作り方を教えて欲しいと言われた。しかし、寿司の準備をしておらず、フランスの食材で作れるのかわからなかったのので、少し慌ててしまったが、うどんを持ってきた旨を話すと、またの機会に作るということになった。

「巻きの技術を見せてほしい」とマダムの息子さんに言われ、外国では「巻き寿司」のイメージの方が強いことを知った。別の日には、スーパーで「巻き寿司セット」のようなものを売っていて、おもしろかった。



『文化教室』

8月23日(金)



『自転車観光』

今日は、少し早めに家を出て郵便局を目指した。外国から実家に手紙を出すことが夢だったので、挑戦してみた。手紙を指して、郵便局の人に「JAPON」というと、あっさり出すことができた。日本に帰ったとき、ちゃんと届いていたようで私の初めての海外からの郵便投函は無事成し遂げられた。

さて、今日のメインイベントはロワール川沿いを自転車で走ることだ。これには少し自信があった。なぜなら中学校、高校、大学と自転車通学で、雨の日も風の日も年間約270日は激走してきたからだ。でも、結論から言うとフランスの広大な土地に惨敗した。

最初の方は、景色がとてもきれいでとても感動していた。本当に車道を走るのだな、とか自転車で走る人が思いのほか多いな、とか考える余裕もあったほどだ。しかし、ヴィランドリー城に着くとやっぱり疲れて、帰りのことを思うといっそのことここで暮らしたいと思った。

肝心なお城の方は、お庭が特にきれいだった。このヴィランドリー城で育てられた野菜や花は無農薬で、周辺住民の方々が買っていきそう。ただの観光地としてだけではなくて、地域に寄り添うという点では、このヴィランドリーが一番なのではないかと思った。



『愛を表す庭園』

また、このサイクリングはトゥール市が今、推している観光政策らしい。5日ほどかけて全ルート
を制覇する本格派もいるし、親子で気軽に楽しんでいる人も見受けられた。ここ数年で関係するガイ
ドブックや用品なども充実してきているらしく、観光として成り立ってきている印象を受けた。

そして、金曜日ということで、夜には下宿生の女の子たちとガングットに行った。「語学学校の友
達だよ」とたくさんの同年代の子たちを紹介してくれた。どこにこんなに人がいたのか不思議なくら
い、たくさんの人が集まって、おしゃべりを楽しんでいた。すごい盛り上がりように驚いて、初め
の方はびくびくして、カレンの後ろに隠れていたのだけれども、何人かが声をかけてくれて、人生はじ
めての夜遊び(?)に無事溶け込むことが出来、最終的にすごく楽しい思い出となった。

8月24日(土)



『迷子中にたどり着いた公園』

土曜日はホストファミリーと過ごすことになっており、ア
リアナと娘さんと一緒にショッピングに行った。洋服を主に見た。
フランス人は思っていたよりも小柄な人が多いので、身長が低
い私にも合う服があった。

歩いている途中で、たくさんのお話を話した。娘さんはなん
と20歳にしてパナマやケニアに行ったことがあるそうで、私
からしてみれば、とてもアクティブな人だった。自分も負けず
に頑張ろうと鼻息が荒くなった。

お兄さんがカギを忘れたということで少し早めに家に帰ったが、私はまだ買い物がしたかったので
一人で出かけた。すると、案の定迷子になってしまい、2時間ほど街をうろろした。その間に、い
ろんなかわいらしいお店を見つけたし、無事に帰れたのでよし、ということにした。迷子になったこ
とを夕食の時間に話すと、心配されたが、同時に笑われてしまった。

夜には、カレンとアリアナに日本語を教えた。カレンは日本に来たことがあるので、あいさつ程度
の日本語を知っていたけれど、アリアナにとっては、発音が面白かったらしい。終始笑っていて何だ
かこっちゃんもおかしくなった。アリアナはものすごい気遣いが出来る部分が多くて、1歳しか離れてい
ないなんて信じていなかったのだけれども、やっぱり同年代の女の子で、それらしい会話が出来て嬉
しかった。

みんな日常会話はフランス語を話していて、それに戸惑っていたけれど、私にも英語で話しかけて
くれるし、きちんと主張すれば話を聞いてくれる。フランスに着いてから、やっと生活に慣れた、と
いう実感を得られた1日だった。

8月25日(日)

特に予定もなかったのですが、シャンボール城見学ツアーを午後から予約していた。お昼はそのために
慌ただしかったものの、時間がこの日しかなかったので、ぶっかけうどんを作った。ただ茹でるだけ
のはずが、マダムに道具を貸してもらうのにも上手く伝わらなかったため一苦労した。それはそれで
うどんが完成した時の達成感が、倍増したけれど。みんなの反応をドキドキしながら待った。満場一
致でおいしいをいただき、『うどん県』を3か国(フランス、スイス、アメリカ)に広めることとなった。
写真がないのは、正直に言うと撮り忘れた。しかし、心の中のシャッターは押してあるので完璧である。

午後からはシャンボール城だ、とウキウキしながら観光局前に行ったが、なんと私の予約は間違われていたことが判明した。せっかく楽しみにしていたのに、私の午後の予定もお金と一緒に返して欲しかった。運悪く、今日はみんな映画を見に行っているし、何をする当てもないので、まだ行っていない美術館に行くことにした。

しかし、超が付く方向音痴の私は昨日に引き続き、迷子になり、美術館探しは2時間で諦めて家に帰り、とりあえず寝た。迷子になることには不安も感じなかったし、もうトゥール市で生活をしている気分だったから、散歩をしたと思えば満足な午後だった、と考えていた。

しかし、目が覚めると、「ちょっと、話しましょう」とマダムに呼ばれ、「なぜすぐに帰ってきて言わなかったのか」「短期間のステイなのにもったいない」、と少し叱られた。叱ってくれるマダムの愛に感激しつつ、真面目にもっと時間を大切に使うべきだったと反省もした。

夕方に、マダムがクレープの作り方を教えてくれた。必殺フライ返しもマダムの手にかかれば楽々とできて、驚きだった。おなじみの、はちみつとライムをくるくるっと巻いて食べた。

そして夜は、ニャンコカフェにも来てくれたアリスちゃんとその彼トーマ君、お世話になったみなさんとラウンジでおしゃべりした。突然、将棋を取り出してきたトーマ君と実は将棋もできる三浦さんの一騎打ちはすごいというよりも不思議すぎる、と思った。



『三浦さん VS トーマ君』

家に帰ると、みんなが映画を見ていたので私も一緒に見た。「ドクトルリンゴ」という映画で、フランス語の字幕と吹き替えで見ていた。何のことかさっぱりわからなかった。途中、こっそりインターネットであらすじを調べてしまったので、もう結末を知ってしまっていたけれども、4、5時間の大作だったので、続きは翌日に持ち越されることになった。

8月26日(月)



『美術館の保管庫』

今日は市長表敬の日ということもあって、初めて市庁舎内に入らせてもらった。外観だけかと思っていたが、中もお城のような作りで感動した。会議室は装飾が少なめだと解説してもらったが、十分豪華な装飾が施されていると思う。また、結婚式場も広々としていて日本では考えられない設備であった。結局今年も市長さんとはお会いできなかったが、高松市長の親書を渡し、残す役目は無事に帰ることだけになったような気がした。

お昼は前年度の研修



『昨年度の研修生宮本さん(右)と伴さん(中央)』



『ミニゴルフ』

夕方には、三浦さんも一緒に私のステイ先へと行き、マダムにミニゴルフに連れていってもらった。初のミニゴルフだったが、みんなと遊ぶ機会があまりなかったので、本当に心に残った。私がいかに下手だったのでみんなに「ここは強く打つよ」とか「頑張って」と何度も言われた。しかし、奇跡的なショットを何回か起こしたので、実は自分には才能があるのだと確信した。4人中3位だけれども、初めてにしては良かった。

帰り際にアイス屋さんによって、アイスを食べ終わると、三浦さんのお迎えが来た。ここでアリアナが三浦さんに向かって急に「こんばんはーっ！」と叫び出すからびっくりしたけど、どうやら「さよなら」が言いたかったようだった。このような学んだことをすぐに話して

みるチャレンジ精神は大事だ、と感心しつつ、やっぱり笑いはこらえきれなくて、みんなで大爆笑した。

帰ってからは、再びマダムの料理講座があり、キッシュを作った。卵や牛乳をミキサーで混ぜ、具はグリーンピースとベーコンを入れるくらいで、思いのほか簡単にできるので、ぜひ日本でも作ってみたいと思った。

そして、夕食後はみんなで前日の映画の続きを見たが、あらすじを大体調べてしまっていた私は少し退屈して寝てしまって、感動的だったというラストを見られなくて消化不良だった。

8月27日(火)

トゥールは最終日である、まずシュノンソー城を見た。広い並木道を抜けて、お城へと着いた。このキッチンには本物の野菜などが置かれているらしい。また、女性的なお城と言われるだけあって、丸みを帯びていて装飾も美しい。しかし、その歴史にはいろんな女性たちの影がちらほらうかがえるわけで、人間も建物も外見だけではない、としみじみ考えてしまった。時間の関係で広い庭には行けなかった。ちなみに、ここの絵葉書などのお土産のデザインが一番かわいかったように思う。

その次はリュセの館へ。レオナルド・ダ・ヴィンチのさまざまな発明品や構想を実際にモデル化したものがたくさんあった。それで空は飛べないだろう、とどう考えても非現実的なものから、とても画期的なものまでさまざまであった。

お昼ごはんでは鍋いっぱいのもう貝をひたすら食べた。あんなに貝を食べたのは生まれて初めてだったが、とてもおいしかった。きちんと、前菜のキッシュとデザートチョコレートムースを食べたことは、言うまでもない。

そして、セグウェイ体験へ行った。「すごく簡単」と聞いていたのだけれども、怖すぎて終始顔がこわばっていた。車と鉢合わせすると、大変な細い道や急こう配の坂を下るので、はらはらドキドキである。しかし、危険ではないので、ぜひ興味がある方は体験していただきたい。歩いていけば大変であろう高い所から見下ろす町なみはとてもきれいだ。

記念すべき最後のお城は、アンボワーズ城。小高い丘の上にあるお城の広場からは町を見下ろすことが出来た。統一された家の高さがとても美しかった。



『アンボワーズ城からの風景』

最後の夕食会にはホストファミリー、市役所の方々、アリスちゃんとトーマ君が来てくださった。夕食の前にアリスちゃんが、おもむろに花札を取り出してきた。もはや、日本のゲームを知らない私が悪いのか、アリスちゃんとトーマ君カップルが知りすぎているのかわからなくなった。それほど、日本の文化や遊びを2人はよく知っていた。

夕食会も終わり、みんなとお別れをした後、マダムと一緒に車で帰った。その時に、「私の子どもたちのように、あなたは世界にもっと出ていくべきよ。」「また絶対に帰ってきなさい」と言われ、嬉しかった。まさに、そのシチュエーションは、私が初めて家に向かうときのような感じだったけれども、その時に感じたような不安ではなく、来てよかったという充実感でいっぱいだった。なかなか前半はマダムとはうまく意思疎通できなかつたけれども、後半からなんとなくマダムのことがわかるようになって、自分の成長を感じた。



『屋根裏の私の部屋』

しかし、その後、何度も私がスーツケースを階段下に下ろそうとするので、みんなが起きるでしょ、と叱られた。(フランスの家は古いので階段がミシミシ言いやすい)

8月28日(水)

朝早くに無事スーツケースも下ろすと、留学生2人が作ったというクレープを朝食に出してくれた。朝早くて、2人にはきちんと挨拶できなかったけれども、きちんと食べたので私の気持ちは届いているはず。

駅まで行くと、三浦さんも来ていて、一緒にTGVに乗り込む。ちょっと出発までの時間があって間が開いてしまったが、やはりお別れは悲しかった。しかしその反面、心のどこかでいつか絶対にみなさんと再会できるような気がして、涙は出なかった。私にはもうトゥール市での滞在だけで十分で、むしろあと2日もトゥールで過ごしたい気持ちだった。

しかし、トゥール市にもう少し滞在したい気持ちとは裏腹に、パリに着くとワクワクした。そこはトゥール市とは違い、都会的で、高いビルが多かった。ホテルまで、簡単に行けるような気がしていたが、なぜかなかなか見つからない。どうも通り過ぎてしまっていたらしいが、その時にはわからず、2人で地図をぐるぐると回していると、親切な日本人の方が教えてくださった。その方はお花屋さんで私たちが滞在するホテルにお花を届けに行く途中だったようだ。トゥール市でフランス語を勉強していたそうで、つくづく縁がある旅行だと思った。

無事、荷物をホテルに置き、さっそくオルセー美術館へと向かった。トゥール駅を作った方が建設したものであるということで、行くことにしたのであった。



『オルセー美術館にて』

オルセー美術館はさすが、世界的にも有名な美術館だけあって、どの絵にも圧倒された。広くて全部は見切れなかった。特に心に残ったのは、中学生のころ模写の宿題をきっかけに一目惚れしたロートレックの作品と対面したことだ。彼の容姿は決して恵まれてはいなかったものの、人を魅了してきたと伝えられているが、それが事実であろうことが生の作品から伝わってきた。こんなにロートレックの作品「化粧」に会えることにな

るなんて、中学生の時の私は考えもしなかったと思う。タイムマシンに乗ってあの頃の私に教えてあげたいくらい舞い上がっていた。

チュイルリー公園を通過して、ブランド店が立ち並ぶ通りに行き、しばらくぶらぶらした後、お昼ご飯を食べに行った。トゥール市と変わらない値段だったけれども、量が違うような気がしたし、英語も通じたので改めて都会だと感じた。

そして、オランジュリー美術館へ。ここはマイナーな美術館らしいが、モネの睡蓮が8枚飾られていた。とても大きな作品で、じっくり眺めているといろんな見え方が出来る。私にとってはこのコレクションは、とても好きなタイプであった。

シャンゼリゼ通りを「シャンゼリゼ」を口ずさみながら通り、凱旋門を少し遠くから眺めることができた。凱旋門は日本でもテレビなどで見たことがあったので、近くまで行って本物を見ようという気があまり起きなかった。しかし、手乗りエッフェル塔はちゃっかりして、写真に収めた。



『噂の手乗りエッフェル塔』

いろいろな人におすすめされたサン・ジェルマン通りに行くと、いろいろなお店を見た。そして、ホテル近くの老舗クレープ店というところで夕食をとった。格別においしいかどうかはわからなかったけれど、外に行列ができていたので有名どころだったらしい。

ホテルでは、ちょっとしたハプニングが起こった。チェックインを済ませ、指定された部屋に行くと、知らない鞆があったのだ。前の人の忘れものかと初めは思ったが、よく見るとソファにはワンピースが掛けられてあるし、パソコンもある。誰が私の部屋に侵入してくつろいでいるの！と、一瞬わけがわからないことを考えたが、どう考えても私が間違えている。すぐにフロントに行き、確認すると向こうの手違いだったことがわかり、もちろん部屋は替えてもらった。

パリは危ない、と無意識に気を張っていた部分があり、大変疲れてぐっすり眠れた。

8月29日(木)



『ノートルダム寺院』

この日は、まずノートルダム寺院に向かった。ステンドグラスのパラ窓はとても美しく、すべてが荘厳だった。また、後ろから見た形は正面からとはまた感じが違うのも素敵だった。

ノートルダム寺院と同じシテ島内にあるサント・シャペルは本当にため息が出るような美しさだった。初めは小さな礼拝堂に過ぎないと思っていたのだが、2階にある大きなステンドグラスを見た瞬間驚いた。今まで見たものに比べて、はるかに規模が違っていた。これを少しずつ修復しているのだが、その修復の作業の細かさも、すごく素晴らしかった。

シテ島のお隣のサン・ルイ島に向かい、買い物や食事を楽しんだ後、更なるショッピングをするべく歩いていく。

ひたすら歩いて歩いて、マレ地区まで行き、また歩いて歩いて、ルーヴル美術館まで行った。ルーヴル美術館がなかなか見えないな、と思っていたのだけれども、実はそこまで見えていた建物がすべて美術館だったらしく驚いた。オルセー美術館だけでも見切れないのに、ここは歩くのも大変だろう。

ホテルで一息入れた後、フランスでの最後の晩餐に行き、バス停の場所を確認した、料金や時間が最初の情報と違っていたり、インターネットとも違っていたりしたので、実際に目で見ることは大切だ。

私たちは地下鉄やバスを使わずにずっと歩いたので、スリに遭うなどのリスクは低かったが、自分の中では人生で一番限界まで歩いた、と思っている。しかし、自分の足を使ったので、パリを知り尽くせた。



『圧巻のサント・シャペル』

8月30日(金)

起きると、前日に三浦さんと決めていた集合時間を過ぎていて、本当にあせった。しかし、ホテルの朝食は、ちゃっかりいただいた。パンが焼き立てでおいしかった。

バスに乗り、シャルル・ド・ゴール空港へと向かう。飛行機ではなかなか眠れなくて、映画ばかり見ていた。行きより気分が高揚していたのかもしれない。

8月31日(土)

高松空港に着き、迎えに来てくれていた両親を見ると、本当に自分はフランスに2週間近くいたのか、分からなくなるような不思議な気持ちになった。それだけあっという間の滞在であった。

でも、2週間前と比べると、はるかに重いスーツケース。あんなに忘れていないか心配だった、うちわや折り紙は全部ないし、その代わりに増えた数々の資料や写真を見ると、自分が体験させてもらったことが鮮やかに蘇ってくる。やっぱりフランスに行って、無事に日本に戻って来られたのが、現実のようである。研修も含めた約2か月がようやく終わった気がした。

感想文



香川大学 経済学部 2年

武上 実佑

トゥール市親善研修を終えて

私が今回の研修に応募した理由は3つあった。一つ目は高松市が好きで、海外の人にも高松市のことを知ってもらいたかったこと、2つ目は国際交流が好きなこと、3つ目は今大学で専攻している地域活性や観光についての勉強に役立てたいということ、である。この研修中には、これらの私の希望をすべて叶えてくれるような経験をたくさんさせていただいた。

まず、高松市についてたくさんの人にアピールできて満足できた。ホストファミリーにはもちろん、文化教室という機会を与えていただき、子どもから大人まで、私の伝えたかった高松市の景色の美しさや文化の豊かさを紹介することが出来た。言葉と写真では伝えきれない部分は多くあるので、特に将来、高松市とトゥール市を繋いでいくかもしれない子どもたちに実際に来てほしいと、この研修を通して思うようになった。

次に、国際交流という面からいうと、今まで、多くは日本に来ている留学生との交流を行ってきたので、今回自分が留学生という立場になる体験となった。異なる文化や言語に慣れない部分も多かった。しかし、ステイ先が留学生の受け入れを行っていたということもあり、さまざまな国籍の同年代の人たちとの交流ができ、その中では、全ての「違い」というものを忘れてしまうほど楽しむことができた。

最後に、今回の研修日程ではトラムの見学やロワール川沿いを自転車で走るなど、まさに私が勉強している地域活性、観光に関する体験をたくさん組み込んでいただいた。また、地元の人々の生活からも学ぶことも多くあった。人が集まるということは地域が元気になるということだが、ガンゲットやプレミアムロー広場など多くの人が集まる場所があるのは素晴らしいと感じた。本の中の事例ではなく、実際に見てみることでヨーロッパの活気の良さというものを肌で感じ、今の専攻をもっと深めていきたいという意識が高まった。

今回の研修で、トゥール市について知ったことも多かったが、なんといっても高松市に暮らし、高松市を好きになってよかったと本当に心の底から思う。私が高松市を好きではなかったら、トゥール市を知ることもなかっただろうし、高松市民であるという誇りを持たずに平凡に淡々と暮らしていたかもしれない。これからもトゥール市との繋がりを軸にして、高松市について他の都市の人たちに発信していけるようなことが出来たらいいと考えている。

最後になったが、さまざまな出会いとお世話になった方々に深くお礼を申し上げる。

親善研修生 報告書 II

正 書 告 廣 坐 辦 和 善 舉

日誌・活動記録

香川大学医学部1年 三浦ありさ

8月17日(土)

今年の春、宮城県から香川県に引っ越しをし、一人も知り合いのいない状況からのスタートだった私が、まさか高松市を代表し、高松市とフランストゥール市の親善を図るためにトゥール市に行くこととなろうとは誰一人として思わなかったであろう。何より、私自身が親善研修生として活動させていただいていることが、未だ信じられないのである。

出発当日は、空港までの足が無い私の為に、武上さんと御両親がわざわざ空港とは逆方向にある私のマンションまで迎えに来てくださり、送ってくださった。高松市に来てから、人々の心遣いがとても嬉しい。

高松空港では、高松市国際交流協会の馬場さん、森田さん、近畿日本ツーリストの方からの激励と見送りがあった。この激励により、果たして親善研修生として務まるのだろうかという不安な気持ちをポジティブな方向へ持っていく事ができ、自分に出来る限り課された使命を果たそうと思った。いよいよ武上さんと2人きりでのフランスへの旅のスタートである。

私たちは何かと共通点が多くあり、この派遣に対する考え方も似ていた。第一目標は、確実に自分たちの使命を遂行するという事。今回の研修はトラブルを最低限に抑え、健康に無事に帰国しようという話をした。この研修は個人旅行と違い、トラブルは私たち個人の問題で済まされない。何かあってからでは遅いので無理をせず安全な範囲で行動したいと考えていた私にとって、武上さんと意見が合致したことが嬉しかった。

羽田空港でトランジットの間、2人で読書を黙々とし、文庫本を1冊読み終えてしまった。

8月18日(日)

予定時刻通りにシャルル・ド・ゴール空港に到着。TGVへの乗り継ぎまでの時間は十分あった。分からず不安になった時は空港職員に尋ねながらTGVの駅へ向かった。フランス人は思ったより気さくな人が多く、地図の前で困っていると英語で話しかけてくれたり荷物を支えてくれたりと親切にしてくれる。その親切をスリや詐欺かと思ってしまう自分が悲しいが、危機管理も大切なので気を抜かずに行動したい。

TGVではスーツケースの置き場に困った。自分で持ち上げられる量、大きさのスーツケースにすべきだと実感した。

駅ではトゥール市国際交流室からダヴィットさんとコーディネーターの伴さんが出迎えてくれ、トゥール市からのプレゼントをいただいた。その後、武上さんと私のそれぞれのホストファミリーと一緒にホームステイ先へと別れた。この時は移動による疲れのため、ホームステイに対する不安よりも早く休息を取りたいと思う気持ちで一杯だった。

ホームステイ先は、ルルーさんご夫婦と25歳の娘のアヌローさんがいる家庭だった。事前の情報では看護学校に通う20歳の娘さんがいるということだったが、その方は家の近くのアパートメント

に住んでおり、同居していなかった。ご夫婦の職業は県職員、アヌローはこの9月から中学校でスペイン語を教える先生だ。ご主人は多少英語が出来るが、奥さんと娘さんはあまり出来ず、また私のフランス語能力は日常会話にも満たないため、意志疎通に問題が生じた。

夕食後に団らんの時間があり、日本から持ってきた私の着物の写真を見せた。ホストファミリーは着物をとても褒めてくれ、日本に行くことがあれば着たいと言ってくれた。アヌローが生活に関する細々とした気配りを優しくしてくれた。私のフランス語が拙いことが悔しい。勉強したはずの単語さえ口からぽっと出てこないし、通常の早さで話をされると一気に分からなくなる。はい、いいえ、美味しい、挨拶などの基本的なものしか言えず自信が無くなってきた。“Je ne comprends pas. (分かりません)”を何度も言う結果となり、本当に申し訳なく思った。

8月19日(月)

9時半に市庁舎に集合。家から車でアヌローが送ってくれ、市庁舎前まで一緒に来てくれた。アヌローは3日後まで仕事が休みらしい。

伴さん、ダヴィットさん、武上さんとトゥールの市街地を歩いて観光した。近代的なトラムや19世紀以降に建てられた建造物と共に15世紀に建造された中世の面影のある木造建造物、そして13世紀から16世紀にかけて建設されたゴシック様式の傑作である、サン・ガシアン大聖堂が残されている。近代的建造物と歴史的建造物の両方が見事に街に溶け込み、一つの街を形作っていた。

一通り観光が終わり、トゥール市国際交流室室長であるアミロー夫人のオフィスを訪問した。その際にアミロー夫人から頂いた言葉の数々から、この研修の責任の大きさ、重要性に改めて気づかされた。トラムが出来たことについて、高松市長をはじめとした高松市役所の方々に、撮影した写真と共に報告してほしいと特に強調してお願いされた。また、私たちがトゥール市で撮影した写真を見せてほしいとお願いされたことに驚いた。私たちのようなトゥール市を初めて訪れる人がどこに、何に興味を持ったのか、何を美しいと思ったのか、自国の人間がとらえている差異が観光客の撮影した写真から分かるらしい。「日常生活をトゥール市で過ごす人には当たり前でも、この街に来てすぐの人にしか感じ取る事の出来ない非日常の面白さを発見してほしい。」と、アミロー夫人はおっしゃった。



『市街地観光』



『最新のトラムと古い木造建築が残るプリュムロー広場』

これらの言葉から、今現在でも十分に観光都市として成り立っているトゥール市も、高松市と同様にさらに観光都市として発展していきたい、そのための意見を集め取り入れて行きたいと考えていることが分かり、トゥール市の観光に対する真摯な姿勢が伺えた。アミロー夫人の言う「非日常の面白さ」は、10日も経つと新鮮味が無くなり当たり前のもに変わるといふ。トゥール市に来てすぐの今の私の気持ちや発見を忘れぬ様、逐一書き留めていきたいと思う。

さらに、今年10月には高松市で日仏合同推進会議が行われる。アミロー夫人はそのために来日する予定だ。将来、そのような国際会議に出席するような人になって欲しいとアミロー夫人に言っていた。このようなお言葉を頂き、今後の国際交流に対する長期に渡る目標が出来た。そのためにも今、フランス語が出来ないからといって、ホストファミリーとの会話を全て英語で済ませようという甘えた考えを排し、一日少しずつでも新しい文章を使っていこうと思った。

アミロー夫人と別れ、伴さん、武上さんと昼食を摂った。伴さんのフランス在住までの経緯を伺った。「自分で選んだ道は後悔しない」の言葉に共感し、常にそれを実行している彼女の強さに感銘を受けた。私も香川大学に入学し、勉強していることに自信を持ち、自分の歩んだ人生を後悔しないと言えるよう努力していきたい。

その後訪れたコンパニオナーージュ（工芸美術館）では、フランス特有の職人徒弟制度を詳しく知ることが出来た。フランスでは、職人同業者組合が3つに分かれており、それぞれ属するコンパニオンがフランス各地を訪れて修行する制度がある。その修行を最後まで合格する人は20人に1人という過酷な旅だ。その修行の旅に合格したコンパニオンが作成した作品が、かつて修行僧の住居だった建造物の中に多数陳列されている。工芸美術館にある作品を見て、改めて徒弟制度で培われる技術力の高さを認識した。



『あめ作りの様子』

次に工芸美術館の隣にあるショコラティエを訪れた。そこではトゥール市に昔から伝わる製法でお菓子が作られている。最古のものは1804年から製造されている、あめである。あめというと、型に流し込む方法とあめを棒状に伸ばして切る方法があるが、ここでのあめの作り方の特徴は、その型が粉であるという点だ。平らに引いた粉に餡の木型を押し付けて窪ませることで、あめの型を作る。この粉を使うことで、あめを型の外にこぼしても型の中に自然と流れるらしい。実際体験させてもらうと、型に均等に早く流し込むことが難しく、形の同じあめを作成することは高い技術が必要なのだと思った。あめに引き続き、プルーンやチョコのお菓子の製造方法も見せていただいた。今回説明してくださった方は、もう引退されているが、わざわざ私たちの為に今日だけ復帰してくださったと伺った。以前高松市を訪問しに来て、ホテルでお菓子教室を行ったこともあるという。このショコラティエの方は高松市名誉市民でもあり、今回の訪問でトゥール市と高松市の繋がりの深さが感じられた。

8月20日(火)

午前中は、8月31日に開通予定のトラム（路面電車）の説明を聞いた。トラムハウスというトラムの説明を市民に行う為に、市がテナントを借り、その建物内で地図や模型、掲示パネル、ビデオが常設されている。1年にわたって市民への理解を深めるための会場を設置し、職員が常駐しているそう



『 ترامハウス』

だ。日本では、市が事業を行う場合、検討委員会が開かれ、市政だよりやシンポジウムで市民への理解を求めることが多い。最近ではパブリックコメントを実施することで市民の意見を吸い上げる方法が取られている。しかし、トゥール市は常設会場を用意し市民の疑問に答え、不満を受け止める場所を用意している。住民への理解を求めるための方法が、日本とは大きく異なると実感した。

午後からは、いよいよ私の専門分野として研修をお願いした病院見学である。病院を訪れる予定時間までに時間があつたので、病院前に広がる植物園及び動物園を散策した。驚くべき点は、そのどちらも市の所有物であり入場が無料であるという点だ。敷地は広大で手入れが行き届いており、小さな子どもを連れてピクニックや、大人もゆっくり散歩を楽しめる場所となっている。このような場所や公園が非常に多い所も、トゥール市の福祉政策の高さが伺えた。

一歩病院の施設に入りまず目を見張るのは、その敷地面積である。広大な敷地に、白い清楚な建物が点在する。敷地に高層ビルが無いことも頷ける。私たちは最初にこのブルトノー病院の広報の方にこの病院の歴史や現状を説明していただいた。日本からすると、人口14万人程のトゥール市にトゥール医科大学があり、その附属病院があることにも驚くが、その病床数にも驚く。日本の国立大学で最大の病床数を誇る九州大学でも約1,300床であるが、3つに分かれているこの大学病院の合計病床数は、約2,000床にも昇る。現在は小児科専門病棟、外科専門病棟がブルトノー病院とは別の場所に建てられており、3つの病院を合わせたトゥール医科大学附属病院全体では約8,000人が働いていることから、その規模の大きさが伺える。フランス国内でも珍しい火傷の専門医が在籍している事、トゥール市から車で5時間の範囲の高次医療をカバーしている事など広範囲に渡って医療分野に貢献している。



『ブルトノー病院』

日本の大学病院との大きな違いは、診療科が独立した建物を敷地内に保持している事や受診システムである。フランスの病院は全て予約制である。予め予約を取り、決められた時間に診察に行き、終わったら帰宅する。どこの病院に行っても日本の様に、受付で待ち、診察室前でも待つという事が無い。フランスでは医療機関でも分業が進んでおり、診察、検査、治療、薬局などに分かれている。日本では薬局は院外で病院の処方箋を持参して薬を購入するが、フランスでは検査も外部委託するのである。利害関係のない独立した機関が行うことで、過剰な検査や薬の処方を防ぎ、医療従事者が不当利益を得て医療保険システムを圧迫するといった弊害を無くすのだそうだ。



『無菌防護服を着て見学』

その後、薬剤部と放射線科を見学させていただいた。薬剤

部はほぼ女性のみが働いており、常に9人体制で動いている。誤った処方をしていない為に2重3重のチェックが行われ、細菌の混入にも厳重な管理がされていた。放射線科では、病棟とガンマナイフの見学をさせていただいた。放射線科だけで病床数70床、ガンマナイフ4台を保有しているにも関わらず非常に閑散としていたが、それも予約制が採られている結果である。将来、このトゥール医科大学付属病院で勉強してみたいと思った。そのためにもまず、日本でフランスに来て困らない医学知識と語学力を身に着けたいと思う。



『薬剤部の様子』

8月21日(水)



『ショーモン城にて 武上さんと』

予定変更になった集合時間や場所をホストファミリーに説明することに苦心したが、出勤する車と一緒に乗せてもらい、無事指定通りに集合することが出来た。習っていないフランス語の使用に焦るよりも、なんとか理解してもらえるように時間と場所はフランス語で言うように努めた。その結果、英語とフランス語が混じった奇妙な言葉を言っていた自分に後々気づいた。簡単な基本文でも、きちんとしたフランス語の文章を頭で組み立てるにはまだまだほど遠い。

午前中は、伴さん、武上さんとトゥール市から車で40分ほどの所にあるショーモン城を見学した。ショーモン城は、ロワール川に沿って建てられている城で、その歴史は10世紀に遡る。アンリ2世の王妃カトリーヌ・ド・メディシスが夫の死後、愛妾ディアヌ・ド・ポワチエからシュノンソー城を取り上げ、その代わりに譲った城塞である。城内部にはタペストリーや彫りがとても繊細な家具が綺麗に保存されている。いくつかの部屋は未だに使用した人物や使用目的が不明であるが、城の概観や現存するアンティークの素晴らしさによって、この城の価値は全く下がらないと思った。

もう一つ、この城の特筆すべき点は庭である。ショーモン城の庭では、フランス最大の庭師による作品の展覧会が開かれている。庭の中に小さなブースが沢山作られており、そこに庭師が一つの世界観を生み出している。創意工夫がなされている作品が多く、飽きずに巡った。その中には日本人の作品もあった。水田をテーマにしており、日本の赤い傘と稲の緑の対比が印象的だった。水田の中には、カエルやオタマジャクシが放されていて、日本にある水田風景に近い環境を作り出し、また、生き物が存在することで動きのある作品に仕上がっていると感じた。

庭以外にも日本人の作ったアートがあった。ショーモン城のある高台からロワール川を一望出来るよう作られ



『水田ガーデン』

た棧橋である。遠くフランスにおいて、たまたま訪れる機会をいただいた場所で、同胞の作品に出会い、こんなにも親近感が湧くものかと驚いた。

トゥール市に戻り、サン・ガシアン大聖堂近くの「円く薄いもの」を意味し、ブルターニュ地方の郷土料理、ガレットの美味しいお店に連れて行ってもらった。種類が沢山あり、迷いに迷ったが、私はハムと生クリーム、チーズのガレットを選んだ。伴さんに、ガレットにはシードル（りんご酒）が合うと教わったので、一緒に食べてみると、ガレットのもったりとどンドンお腹に溜まっていく感覚がシードルの酸味により爽やかに打ち消され、ガレットを次々口にすることが出来る。この食べ合わせは新発見の美味しさであった。デザートも食べずにはいられないと、武上さんとクレープを分けて食べられるように注文してもらった。すると、お店の方の気遣いで2個の小さなクレープを作ってくれた。フランスではホスピタリティや細やかなサービスは日本より劣っているのではないかと思っていた。しかしトゥール市滞在中にこのような気遣いを大小多数いただき、人々の温かさや優しさを実感し嬉しくなった。日本に来る外国人にも喜んでもらえるような気遣いを自分も行いたいと思った。

昼食後は、ジュエ・レ・トゥールというトゥール市の隣町に移動し、子どもに向けた文化交流を行った。文化交流は、子どもたちが学校の夏休み期間中に通う文化教室で行われ、屋外で開催することを知らされた。このようなデモンストレーションは自分にとって初めての試みで、うまく進行するか不安だ。子どもたちは10歳から13歳の18人。黄色人種、白色人種、黒色人種と多人種が混合しているが、皆フランス語のみで会話しており、好奇心旺盛な様子。アミロー夫人も来てくださった。

まず初めに、伴さんが、うちわ団扇の作り方の説明をしてくださり、デモンストレーションを行った。そして糊付けしたうちわを乾燥させている間に、武上さんの高松市の紹介と私の書道の説明を行った。日本で研修を受け、先生に教えてもらい練習して挑んだが、かなり緊張しており、つかかる事が多くなってしまった。もう一度あるチャンスではゆっくり、はっきりと発音し、スムーズな発表になるよう心がけようと思った。私の思いに反し、アミロー夫人からは発音を褒めていただいた。フランスへ来て初めて、日本での努力が形になって表れたと思った。



『屋外での丸亀うちわ製作』

書道では、想像以上に子どもが興味を示してくれた。最初のグループでは、「友好」を皆が書きたがった。海外の子どもは自主性を育む教育がなされるとよく聞く。そのため、私は、彼らの自己主張が強いのではないだろうか、自我がはっきりしているのではないかと考えていた。彼らは私に手をとって一緒に書いて欲しいと望み、勝手なふるまいをすることなく素直に筆を動かしていた。先生の言う事も良く聞いており、日頃の教育水準の高さが伺えた。残念ながら時間が足りず、全員に書道を書いてもらうことが出来なかった。明日はもっと効率よくスムーズに進行できるようにしたい。

アミロー夫人に、将来フランスで働きたい、勉強してみたい旨を伝えると、嬉しそうに、ぜひトゥール市に帰って来て欲しいと返していただいた。この言葉を只の社交辞令と取らず、自分で実現できるようにしなければならないと考えた。

8月22日(木)

今日はトゥール市近くの小さい街ブブレーにあるワインカーブを見学した。案内は、昔香川県で仕事をなさっていたこともあるフランス人のソフィさん。日本語も自由に使いこなし、丁寧に案内し



『広大なブドウ畑』

てくださった。施設の案内ツアーまでに時間があつたので、近くのブドウ畑を訪れた。ブドウは宝石のように美しく沢山実っており、きちんと整備されたブドウ畑が見渡す限り続いていた。今年は6月にひょうがこの地域を襲ったためにブドウがダメージを受け、残りの生育も遅く、収穫が例年より1か月遅くなるという。ブブレーでは、ワイン作りの歴史が古く、白ワインとスパークリングワインが有名だ。ワインカーブとはその名の通り、洞窟がワインの醸造所になっている。ワインカーブの説明は洞窟

の中で行われた。外気温が25度程であるのに対し、洞窟内は15度程で半袖では寒い。どのようにワインの熟成を行うかに重きを置かれた説明だった。現在はほぼオートメーション化がされているが、昔はワインと砂糖、酵母を混ぜ合わせたボトルを熟成させる為に手で1本1本回していた。1日に1人の作業員が回すボトルの数は8000本。気の遠くなるような作業だと思った。

ワインカーブを去った後、ソフィさん達とガンゲットで昼食を摂った。ガンゲットとは、夏の間にロワール川沿いにオープンするレストランや酒場を指す。私はこれがガンゲットでの初めての食事となった。このガンゲットはミニゴルフやビーチバレー、遊具が備わっており、夏休み中の子どもを連れた家族が多くいた。料理を待つ間に、ソフィさんに昔日本に滞在していた時のアルバムを見せていただいた。ソフィさんは1994年から1997年まで香川県国際交流課で働いていた。その時の写真を拝見すると、私の知る現在の高松市とは景観が大きく変化している事が分かった。再開発が成功した地区以外の観光スポットでも近代化が進み、昔の景観が街の中に残されていないことを残念に思った。高松市から遠く離れたトゥール市で、約20年前の高松市を知るソフィさんとお会いしている事に不思議な縁を感じる。ソフィさんの夢は、ブブレーワインを高松市に広める為の交流会を開くことだという。国際交流を長年真剣に考えているソフィさんの夢を実現するためのお手伝いができればいいと思う。

午後からは二度目の文化交流を行った。会場はニャンコカフェという漫画喫茶。漫画喫茶というと個室に区切られたものをイメージしていたが、カフェの中に漫画やゲームが陳列されているお店で、和室もあるカフェであった。店名通り、猫が1匹悠々と店内をかつ歩している。集まってくれたフランス人は総勢大人20人。うちわを3人で2つ作った。昨日の子どもより作り方の理解が早く、スムーズのうちわが作れ、中には個性的な縁を形作る人もいた。今後うちわ作成を行う場合は、マスキングテープを使うなど糊の使用を減らすとやりやすいと思う。日本語が多少理解できる人が多かったため、書道もうちわに文字を書くところまで出来た。初めて筆を持った人にはいい経験になったのではないだろうか。

8月23日(金)

今日は日本でスケジュールを聞いた時から楽しみにしていた自転車での古城訪問である。アミロー夫人、伴さん、武上さんと4人でトゥール市から往復4時間自転車に乗ってヴィランドリー城へ行った。体力のない私にとって、途中辛い時もあった。しかし終わってみると、非常に印象深く思い出に残っている。車で移動では観光地ばかり目が行くが、自転車に乗って移動するとそこで暮らす人々の生活が垣間見える。今日のツアーでは、農業大国フランスの農場風景を眺めることが出来た。

ヴィランドリー城は16世紀に建てられた。何ととっても特徴的なのは庭である。幾何学模様を庭に作り出し、その中に意味を持たせている。「愛の庭園」は4つの愛を示し、それぞれ優しい愛、情熱の愛、移り気な愛、悲劇的な愛を意味している。何ともフランスらしいエスプリの効いた遊び心だ。

現在、この愛の庭園の他に存在する菜園は、そのいくつかが有機栽培に移行しているらしい。それまでも非常に美しいと評価されている物を更に改善しようという気概が感じられた。シンメトリーに整然と整備された庭は、どれほどの手間暇が必要なのだろうか。菜園には、ブドウ、洋ナシ、茄子、南瓜、トマトなど収穫できる野菜が多数栽培されており、見た目だけでなく実用性も兼ね備えた庭となっていた。



『自転車用に整備された道路が続く』



『ヴィランドリー城の美しい庭』

私たちが今日体験したような自転車ツアーを、‘La Loire à Vélo’（自転車でロワールを）という。トゥール市が観光政策として打ち出しているもので、整備されたサイクリングロードを走りながらロワール渓谷を楽しむツアーだ。フランス人をはじめとした欧米人には人気を博しているが日本人には馴染みの薄い散策方法で、アミロー夫人から帰国したらぜひ高松市民に広めてほしいと言われた。小学生程の子どもから高齢者まで幅広い年齢層の人々がサイクリングを楽しんでいる姿を見て、日

本人旅行者も興味を持つ可能性が高いと思った。そのためには情報の周知、特に自転車のレンタル方法や道路標識、地図、マナーなどを広めていく必要があるだろう。

8月24日(土)

週末はホストファミリーと楽しむスケジュールになっていたが、今日は午後からホストファミリーが全員忙しい為、一人で古城めぐりのバスツアーに申し込もうと考えた。

午前中はマダムの買い物に同行した。ここで驚いたのは、フランスでは一般的だという買い物のシステムだ。日本ではインターネットショッピングは、注文した商品が自宅まで配送される。しかし、フランスでは注文した商品を車で取りに行くのである。マダムが車を止めたとき、私はガソリンスタンドかと勘違いした。単にカードリーダーが脇に敷設されただけの殺風景な倉庫だったからだ。それにカードをかざすと、数分後に倉庫の中から注文した商品が入ったカートを持った店員が出てきて、客の確認を取りながらバーコードを読み取り、その商品を車に積んで買い物は終了だ。カードをかざしてから車を出すまで約5分。自分でカートを引いて店内を巡り会計に並ぶよりも、自分の目で確認し買い物ができるこの方法は非常に効率が良いと感じた。尚且つ、自宅にいなくても良いというメリットもある。

観光局で古城めぐりツアーの予約を済ませ、1人街をぶらぶらしてから集合時間に観光局に行くと、同じツアーの参加者は1組の男女だった。夫とみられる男性に日本語で声を掛けられた。よくよく話をしてみると、京都大学に留学経験があるニューヨークの有名大学の外科医師であった。話を聞けば聞くほどすごい医師だ。アドバイスを沢山いただき、ここでも勉強を頑張れと励ましてもらった。意

欲とは何気ない出会いからも生まれるものだと実感した。

ツアーでは、途中からアンという名前のブラジル人女性が参加し、私はアンと一緒に城を見学した。英語が流暢で、性格もはっきりとしていて意見を交わすことが楽しかった。

シャンボール城は、かつては世界遺産にも単独で登録されていた、ルネサンス様式にフランス中世の伝統的な建築方法を取り入れた珍しい城である。狩猟小屋を起源とするにも関わらず、豪華絢爛な部屋が多く、部屋数も440を数える。ダ・ヴィンチが設計したとも言われる、人がすれ違わずに通ることが出来るらせん階段、美しく装飾が施された屋根など見どころが多かった。

次に訪れたのはシュヴェルニー城。この城は「タンタンの冒険旅行」シリーズで登場するムーランサール城のモデルとなったことでも有名な城だ。シャンボール城を見た後なので、規模の小ささは感じたが建築された17世紀当時のままの内装や家具、タペストリーのコレクションが素晴らしかった。また、珍しい点は犬舎があり、90匹の猟犬が飼育されている様子が見学できた。

家に帰り、夕食にちらし寿司を振舞った。こちらで材料を揃えることに不安があったので、日本からパックのご飯とちらし寿司の素を持って行った。ご飯を温めて、ちらし寿司の素を混ぜ、錦糸卵を焼き、サーモンを載せただけの即席ちらし寿司である。ホストファミリーは寿司が好物で、完食してくれた。今日、私が夕食を作るという事でケーキも用意してくれ、更にアヌローが可愛いピアスをプレゼントしてくれた。毎日良くしていただいているお礼をしようと思ったのに、思わぬプレゼントを



『ホストファミリー』

いただき、その気持ちがとてもうれしかった。食事の後、ワインを飲みながら団らんしている時、東日本大震災の話になった。私はその当時のことを話し、凄惨さを動画で見せて伝えた。夫妻は私の両親と同じ仕事に従事しているため、当時の両親の仕事内容に関心があったようだ。文化交流の時に使った震災への援助への感謝の意を伝えるフランス語が役に立った。

8月25日(日)

この日は、ムッシュ(ホストファザー)の友人が執筆した本の出版記念のサイン会を近くの森で行う予定だった。昨日に引き続き雨が降ってしまったため、サイン会は中止になり、予定が潰れてしまった。午前中はアヌローとマダム(ホストマザー)が地元で人気の雑貨店に連れて行ってくれた。おすすめの食べ物、特産品、フランス製のファブリックやインテリアなど、説明をしてもらいながら見てまわった。フランス語が不自由な私にはとてもありがたく、安心して買い物が出来た。

午後は、予定の空いたルルー夫妻がシャトーに行かないかと誘ってくれた。私が、城が好きだと言っていたことを覚えていてくれたらしい。まずは、アゼー・ル・リドー城を訪れた。川の中州に建設された水に浮かぶ小さな城である。中央階段が印象的で、屋根裏部屋が広いワンフロアになっていて屋根の建築様式が分かる作りになっている。外見は優美でありながら、内部は実用的で住みやすそうな城だと思った。

次に訪れたのはサシェ城。ここは現在トゥール市出身の文豪バルザックの博物館となっている。到着時間が遅かったため博物館は閉館していた。ルルー夫妻と写真撮影を楽しんだ。

明日からはアヌローが仕事でオルレアンに滞在することになっている。一緒に摂る最後の夕食と

なった。夕食の後は、伴さんが迎えに来てくれ、市役所前のカフェに向かった。本当はガンゲットで交流会を行う予定だったが土砂降りの雨が降ったため、屋内での実施になった。以前高松市を訪れたことのあるアリスさん、トマさん、ダヴィットさん、トゥール美術館の職員であるヴェルジニさん、伴さん、武上さんが参加した。それぞれ歓談をする間、私はトマさんと将棋を指した。ルールはほぼ忘れてしまっていて、駒の動かし方すら危うかった。結果は1勝1敗。まさかフランスで将棋を指すとは想像もしていなかった。



『ムッシュ（ホストファザー）と』

8月26日（月）

いよいよ市長表敬の日である。市役所に向かう前に郵便局の場所を教えてもらい、切手を買に行った。日本で切手を買う時の会話を練習した記憶を思い出し、勇気を出してフランス語のみで注文を試みた。スムーズに買うことが出来、勉強してよかったと思った。



『ブリュネ市議会議員と』

市長表敬の前に、アミロー夫人に市役所内を案内していただいた。市役所も、トゥール駅やサン・マルタン教会、オルセー駅などを設計したヴィクトル・ラルーさんが設計しており、市役所というより美術館、または城と言ったほうが私にはしっくりくるほどの豪華な建物だ。中央入口から入った正面にある大階段で、アミロー夫人が、市役所は市民だけでなく、旅行者も含めた万人のための場所、と言ったことが印象深い。日本では役所というと、憩いの場であることは少ない。しかしトゥール市庁舎前にある階段が待ち合わせに使われたり、日光浴をしたりする人もいるという。役所は用事以外では訪れてはいけないという、役所に対する自分の固定観念に気づかされた。

市長表敬では、残念ながら市長は欠席のため代理の方の出席だった。高松市長からの親書の代読をつかさどり、緊張したがなんとかこなすことが出来、その後の和気あいあいとした歓談も楽しかった。今回市長表敬にご参加くださった方々とのご縁を忘れず、トゥール市と高松市の友好関係をより根強いものとなるよう貢献していきたいと実感した。

その後は自由行動の予定を変更し、トゥール美術館を訪問した。ここは、今回の文化教室に参加していた、トゥール美術館に勤めているヴェルジニさんが案内してくださった。この美術館の有名な作品について、時代背景や作者など丁寧に説明していただいた。美術品の解析、修復作業現場、保管庫という普段一般人は見る事が出来ない場所も案内してもらうことが出来、充実した美術館見学となった。

8月27日（火）

今日は一日古城めぐりの日。ダヴィッドさんが車を回してくれた。その車もトゥール市の公用車で、この観光も市の事業なのだと気が引き締まった。シュノンソー城、クロ・リュセ城を巡ったあと、セ

グウェイ体験をした。これも初めての体験である。方向やスピードが自分のバランスのとおり次第で変化するため、慣れるまで周囲を見る余裕がなかった。しかし、段々と慣れてくるとスキーをしているようで乗るのも楽しく、景色も楽しむことが出来た。最後に、時間的に厳しいと思われたアンボワーズ城の内部も見学することが出来て、滞在期間中トータル9つの古城を見学することになった。それぞれの城の歴史や建築的特徴を知り、この地方の文化と城が担っている観光における重要性をより実感することが出来たと思う。



『シュノンソー城』

8月28日(水)

7:59 トゥール駅発のTGVに乗り、トゥール市を発った。ルルーさん夫妻、武上さんのホストマザーであるパスカル夫人、伴さんが見送ってくださった。この10日間の日々が走馬灯のように頭の中を巡った。

パリに到着し、ホテルにチェックインした後、武上さんと観光に出かけた。パリで私たちが一番行きたい所はオルセー美術館。今回トゥール市を訪れ、トゥール市に関連する物をパリでも見たかったからだ。オルセー美術館は、昔使われていたオルセー駅であり、その駅はトゥール市出身のヴィクトール・ラルーさんが設計したものだ。彼の名前はトゥール市滞在中たくさん聞いた。トゥール駅、市庁舎、サン・マルタン教会というトゥール市を代表する建築物を設計した人だからである。

ホテルからオルセー美術館までは約3km。地下鉄かバスを利用するのが一般的だ。地下鉄はスリが怖く、バスはつまらない。街をぶらぶらする事も旅の楽しみだと、私たちは歩くことにした。迷いながらも30分程度で美術館に付き、学生チケットを買った。私はパスポートでは学生という証明が出来ないので日本で国際学生証を作って携帯していた。この学生証によって入館料や乗車券が安くなり、世界中で利用できるためしておくことをお勧めする。



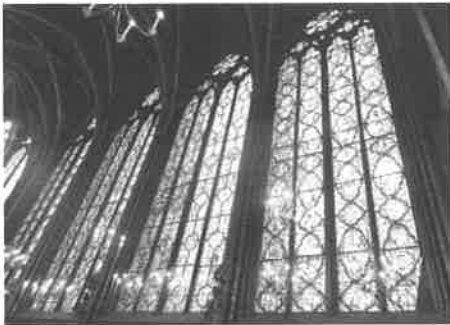
『セーヌ川』

オルセー美術館は、想像以上に広大な美術館だった。作品一つ一つに目を奪われ、ゴッホ、モネ、ルノワール、ドガ、スーラといった自分の好きな画家の絵を思う存分楽しんだ。ルーブル美術館よりも人が少なく、ゆっくり鑑賞できる。武上さんも私も、同じ階に好きな画家の作品が展示されており、時間にも限りがあることから一部のみを鑑賞した。

昼食を摂り、ソフィさんやアミロー夫人からお勧めされたオランジュリー美術館へ向かった。この美術館はモネの睡蓮の絵をメインに、印象派とポスト印象派の作品が展示されている。睡蓮の連作を収めるための美術館として整備された部屋は、自分があたかも池にいるような錯覚をしてしまうほどである。天井からの日の光を増幅させるような白い壁に、モネが晩年に作成した暗いトーンの睡蓮が飾れており、中央に置かれた椅子に座って見学すると、立って見た絵の印象とはまた違った色のコントラストが見える。地下の印象派の絵も充実しており、派手ではないが全ての作品を鑑賞する間集中力が切れない美術館だと思った。

パリでの第一目的を達成し、精神的な充足感を得た私たちは、シャンゼリゼ通りを歩き凱旋門を遠目に眺めて帰った。夕食には有名なクレープのお店を訪れ、パリでの一日目を終えた。

8月29日（木）



『美しいサント・シャペルのステンドグラス』 今日でパリ観光も最後である。天候も良く、私の念願だったノートルダム大聖堂の見学から観光がスタートした。昨日の散策である程度主要な道路が分かり、比較的スムーズにノートルダム大聖堂のあるシテ島に行く事が出来た。ノートルダム大聖堂はローマ・カトリック教会の大聖堂であり、200年の歳月をかけて建てられたゴシック建築の傑作である。今年には建設850周年に当たる記念の年で、正面入り口にはステージが作られていた。中に入ると、天井が高さ33mもあるアーケードで作られている荘厳な聖堂が現れる。これまで沢山の教会を訪れ、その度にキリスト教徒ではないが厳肅な気持ちを感じてきた。しかし、内部を見学している最中、ふと違和感を感じ、隣を見ると中国人観光客が子どものおむつを替え始めた。もちろんここはトイレではなく、教会である。時々マナーの悪い人を見てきたが、ここまで最悪なマナーを目の当たりにする事は無く、気分が悪くなった。気持ちを切り替え、階段を昇りステンドグラスを見学した。バラ窓という巨大なステンドグラスを中心に、ステンドグラスが散りばめられている。日の光がステンドグラスに当たって極彩色に光って心が洗われたような気分になった。尖塔へは長蛇の列が出来ており、登ることを断念し、近くにあるサント・シャペルを訪れた。ここは1248年に完成した2層式の礼拝堂が存在する。1階には一般用の礼拝堂が存在し、質実剛健な様子であった。2階は王族が使用していたという事が頷ける豪華絢爛なステンドグラスが聖堂の4方を覆う。このステンドグラスはパリ最古のもので、創世記からの流れが示されている。ため息が出るほど美しかった。

サン・ルイ島で昼食を摂り、午後からはお勧めされた通りを散策。マレ地区に行ってみると、それまでトゥール市やパリ中心部ではあまり見かけなかった黒人やユダヤ系の人々が沢山いて、エキゾチックな雰囲気であった。地区によってこんなにも違う街並みがあるという事が分かり、パリの文化の奥深さが垣間見えたような気がした。

8月30日（金）

朝7時モンパルナス発の空港行きバスに無事に乗車でき、飛行機への搭乗なども万事順調であった。

8月31日（土）

高松空港では温かい出迎えをしていただき、帰国の喜びと安堵感をかみ締めた。この14日間の研修で、普通の個人旅行では体験出来ない素晴らしい体験を沢山させていただき、充実した日々を過ごすことが出来た。また、トラブル無く全ての研修を終えることが出来たことは、多くの方々のご協力に寄るものである。今後、この研修の経験と感謝を忘れず、これからの日々を過ごしていきたいと思う。

感想文



香川大学医学部 1年

三浦 ありさ

感謝

地中海を思い起こさせる温暖な気候・・・今春、遠く宮城県から香川県に移り住んだ私が、まず高松市に抱いた感想である。厳しい寒さが当たり前の地域に住んでいた故感じたことだった。このような外部からの視点で、高松市の良さを発見する事が出来るのではないか、さらにはフランスの方々に東日本大震災への温かい援助に対する感謝を伝えたい、と思いこの派遣研修に申し込んだことから、全てはスタートした。

トゥール市では2回に渡る文化交流において高松市の文化遺産を発信し、また、トゥール市の観光政策や福祉政策、医療福祉を見学、体感し、感動の連続だった。フランスは治安が悪いという事を忘れてしまう程安全で、道路も観光地も整備された美しい街である。歴史的建造物と近代的なトラムとの調和は素晴らしく、全く違和感を感じさせないものだった。高層ビルを建てない、電線は街の中心部には引かない、ロワール川沿いには新しい建物を建築しないとといったことなど、景観を壊さない為の工夫が随所に見られた。今回私たちが体験したトゥール市が打ち出している自転車での古城めぐりは、欧米人には一般的だが、日本ではまだまだ知られていない。観光地だけでなく農業大国フランスの農村部や自然豊かな地方を眺めながら旅行するこのツアーは、日本でも需要は高いだろうと感じた。そして、私の専門分野である念願だったトゥール医科大学病院見学もさせていただくことが出来た。大学病院の規模の大きさ、そして完全予約制という日本と異なる受診システム、患者に施される細やかなケアに驚かされ、実際に現場を見る重要性を再認識したのである。トゥール市に滞在した10日間は驚きと新発見、そして感動の連続だった。今後、この感動を多くの人に伝えていきたいと思う。

今回の研修では高松市、トゥール市の沢山の方々に大変お世話になり、個人旅行では体験できない多くの経験をさせていただいた。私たちの研修が無事感動の中終えられたのも、25年という長きに亘り高松市が続けてきた国際交流の基盤によるものと実感している。出会った方々との繋がりを大切に、語学や医学知識の習得に日々研鑽を重ね、高松市の国際交流に貢献できるよう精進していきたい。この研修が、私の人生に大きな影響を及ぼすだろう。



